

いまなぜネオナチの活動が活発に行われるか

91E025 本 田 雅 美

ネオナチと聞いて連想する事というと、無差別に町を爆弾で破壊したり、外国人労働者を排斥する思想からあらゆる活動を行ったり、またその名前からナチスがしたようにドイツをヨーロッパに君臨する国にしようと考えているのではという事を思い浮かべる。ドイツはナチスの蛮行を世界中から非難され、自身からも激しい自責の念により終わらない罪の追及を行っているのに、なぜ今またナチスの名を冠した集団がドイツ国内に存在するのかと疑問に思わずにはいられない。

私の取り上げた『ナチス追及ードイツの戦後』（望田幸夫著、講談社、1990年）では、いまドイツを問う意味として、統一したドイツがヨーロッパにおいて、平和と安全に貢献するためにはドイツとドイツ人が過去を、とりわけナチス時代の過去をどのように受け止めその暗影をどうぬぐい去るか、今後どのように対処しようとしているかの点を挙げている。今日あらためて「過去の克服」の跡を振り返ってみる事は、ドイツと似た道を歩んできた我々日本と日本人にとっても教訓を求める元となるだろう。

ナチス追及という問題は、ユダヤ人など虐殺・迫害された人々、つまり被害者の側からの追及と、ドイツ人自らによる裁きと二つある。第一章ではこの問題を扱っている。このナチス追及の手は政治や文化の頂点に立っている人達にも容赦なく向けられ、その中では彼らの人間的地肌とも言うべきものを白日のもとにさらしていく。第二章ではこうした人物の例を挙げるが、こうした頂点に立っている人達だけでなく、ごく普通の元ナチス関係者たちの苦悩の姿もかいま見る。そして第三章では元ナチスの追及だけでなく、新しいナチ、ネオナチの台頭に注目する。そこでは元ナチス関係者を中心とする極右運動＝旧ネオナチとともに、1970年代後半からクローズアップされてくる、「ヒトラーを知らない世代」を中心にした新ネオナチの動向を追う。その中では、ネオナチ運動を生み出している社会的状況と、特に青少年たちの姿を描いている。最終章では1990年代を迎えた今日、ドイツとドイツ人は新たな竿頭に立っている。90年代にはナチス関係者が生物的に死に絶えて行く事と、東ドイツの国民的民主運動の激発の中で、東西ドイツの統一問題が国際政治の最前面に立ち現れてきた事である。この二つの新たな状況をふまえつつナチス追及の問題の行方を問うことをテーマとしている。

初めに挙げた、ネオナチに対する疑問の答について考えてみる。まずネオナチと呼ばれる集団は、極端な右翼、つまり極右の事である。極右という事であれば、ヨーロッパのどこにでも、また日本にもある話である。ネオナチ問題とはつまりドイツにおける極右問題の事である。それではなぜドイツにおける極右は、ネオナチという呼称を持つのであろうか。ドイツ現代史における極右にはさまざまなタイプがあるが、最大・最強にして独特な極右がナチスである。なぜ独特であるかというのかは、ナチスが普通極右という言葉から連想されるような秘密結社的で少数精鋭的な暴力行動に終始したのではなく、むしろ壮大な大衆運動として、また選挙などの合法的舞台で大々的な活動を展開したからである。さらに、このような活動だけでなく、

イデオロギー的にも復古や現状肯定ではなく、むしろ積極的な現状打破の色調を帯びていたからである。ナチスはこういった独特な性格を持ちつつもドイツ現代史における最大・最強にして成功した極右であった。ナチスの中には極右運動における政治的イデオロギー的に豊かな武器が用意されている。ここにドイツにおける極右勢力が大なり小なり現状のナチスの継承者として（ネオナチとして）登場してくる理由があるのだ。どこの国の極右も、その国の歴史的伝統に湯あみして形成されるからである。このような意味において、ネオナチ問題はドイツにおける極右問題であり、この点で現代日本にも通ずるものを持っているのである。

ネオナチのルーツはどこにあるのであろうか。人的ルーツとして考えられているのは、まず人的に厚い層を成した元ナチスの残存である。しかし人的残存だけが元になったわけではない。国民の世論調査結果がここに挙げられていた。ドイツ国民のナチズムの理念に対する考えについて問うものであったが、その理念に限っては良いと考える人の割合が、悪いと考える人を大きく上回ると言うのである。それはナチスの思想への国民の共感の広がり、悪くは国民意識の底にある「ナチズムの残影」であるといえよう。国民の共感の裏にはゆがんだヒトラー像があったのではないかとも思われる例も挙げられていた。また、戦争・ナチズムを体験した大人とは断絶した世代が登場してきている事も大きな要素である。彼らは戦争の惨禍に目を向けていない。彼らの思想はさまざま、極右、左翼、政治的無関心などがおもにそうだが、ここに極右、ネオナチの社会的基盤が形成されている事を見落としてはならない。そして最後に挙げられているのは、ヒトラー・ブームによるヒトラー・タブーの崩壊である。アメリカでの「第二次大戦もの」ブームのなかでヒトラー物も出版されるようになり、その流れがドイツにも押し寄せたため、何の罪の意識も伴わない「ヒトラー・ナチス」の大衆風俗化も促進してしまった。こうして70年代に二度起きたヒトラー・ブームは、ヒトラー・タブーを打ち破ったのである。それはドイツ国民の中に、若者世代からネオナチを生み出す原因となり、また反対にヒトラーとナチスの残虐性をあらためて認識させた事によって、過去への反省の精神を再活性化した。このことは、ナチス犯罪の時効を無くした事にあらわれている。

現在ドイツの刑法では、ハーケンクロイツを用いたり、ナチスの宣伝をしたり、他民族（特にユダヤ人）を蔑視する事は禁じられているが、こうした不法行為はネオナチによる一連のテロ活動にまでエスカレートしていく。そこには全体としてどんな特徴が見られるのであろうか。彼らは行動極右であった。旧ネオナチは選挙などの合法活動のため表向きは民主的に装っていたが、新ネオナチはナチズムをためらいなく呼号している。第二に彼らは「ナチズムの遺産」に対して防御の構えが弱い、「ヒトラーの孫世代（ヒトラーを知らない世代）」であった。ゆえに彼らは30才以下の人が70%を占めている。

では、こうした「ヒトラーの孫たち」が暴走する社会的背景としては何が考えられるのであろうか。第一に失業率が4.8%で約130万人の人が失業しているという現状が、若者たちに前途への不安を与えた事が考えられる。この数値が表す状態は決して社会的危機を表すものではないが、敏感な若者たちに不安を抱かせる役割は十分果たしたのであった。第二に、外国人労働者問題がある。西ドイツでは70年代初頭の好況以来、深刻化した労働者不足のため、外国人労働者をトルコ、ユーゴスラビア、イタリアなどから積極的に導入してきたが、失業や就職難が生じてくると、外国人に職場を奪われているという極右（ネオナチ）の叫びが耳に入りやすくなり、ネオナチにとって外国人労働者の排斥は彼らの排他主義、ナショナリズムの絶好の宣伝材料となっていたのだ。

ネオナチを生み出す社会的背景がこのようなものであると分かったが、では彼ら若者たちの心理的背景はどのようなものであったか。暴力への志向を強め、現状否定的な行動へと走っていくものとなる要素として、第一には複雑な政治への不安感・無力感、第二に毎日の生活の確固たる心理的なよりどころを欠いていること、第三に第一、第二に挙げた要素の裏返しとして、「強者の論理」と言うべきものへの肯定が見られる。「毎日が闘争であり、強者が勝利するに違いない」という思想の容認は、暴力への志向を生み出す温床である事は重要な点である。これらの心理的空白を行動によって埋めようとする行動心理は彼らによって共有されているのである。

では、こういった極右（ネオナチ）の進出や暴力行為の多発化はドイツの政治と社会に何を問いかけているのであろうか。極右＝ネオナチの進出背景には外国人問題によるところが大きいだろう。それに加えて東欧からの移住者の問題もある。こういう状況の中、移住者たちに住宅を提供し失業手当を支給していることが社会福祉を圧迫し、住宅に悩む低所得者層の不満をつのらせ、極右＝ネオナチによる外国人排斥の煽動を効果あるものにしてしているのも確かであろう。しかしこの状況のまま放置しておくことはドイツは排外主義の国として近隣諸国からの非難にさらされざるをえなくなることを意味する。在住外国人の選挙権について、「在住外国人は市民ではない」「外国人の選挙権に断固反対」というネオナチと同じようなスローガンさえ掲げる政府、与党の発言も存在する。ある産業労働組合はこれに真正面から反対し、外国人労働者がこれまでドイツの発展に貢献してきたことを指摘し、失業問題の本当の原因は経営者側の合理化攻勢にあると主張している。また住宅難の原因も、政府が公共住宅建設の助成金を中止したことにあるとし、さらには全国組織の労働総同盟も、在住外国人へ選挙権をあたえることを要求している。

ネオナチの進出問題は、政府や企業の産業・住宅・外国人などに対する諸政策全般が、「右」からの現状不満を蓄積させ、それが極右＝ネオナチによる煽動効果を発揮させる結果になっていることを指摘せずには考えることはできない。ネオナチの進出は「かつてのナチズムの国」における「過去の残影」ではなく、むしろ今日のドイツにおける政治のあり方そのものが産み落としたものなのである。これは新ネオナチの暴走に見られる社会的・心理的背景を考えることによって明らかになるであろう。ドイツにおける極右＝ネオナチの進出や新ネオナチの暴走がはらんでいるものは、すべての先進工業国における政治と社会に共通する問いかけであるといえよう。

この本を読んで分かったことはあまりにも多かったが、ネオナチについて知った特に興味深い点は、ネオナチは極端な右翼であり、それがナチスの歴史を踏まえて形成されたものであり、なおかつ現代ドイツ社会の反映そのものであるという点である。ドイツとドイツ国民はナチスの行ったことを忘れてはならない。もし忘れてしまえばネオナチによるかつてのナチスによる恐怖の政治が行われる可能性が生まれる。ドイツ自身によるナチス追及の精神が終わることのないように望む。